

地域の子どもをつくる - 多田源流太鼓への挑戦 -

川西市立多田小学校



太鼓の打ち手は毎年最高学年の希望者から選ばれる。四半世紀も続く多田小の挑戦だが、伝統の継承という意気込みで、子どもたちに「大変な練習だが、自信を持って学ぼう」と伝えている。

太鼓の借り受け費用はPTAの支援をいただき、実技指導は6年生の先生によってである。和太鼓は高価な楽器であるため、いつでも借りられる状況ではないが、6年生のやる気を起こす効果はある。

また、運動会とはいえ地域貢献活動となっている側面があるため、「学ぶ目的や続ける意味」を見つめ直させ、継承したいものである。問題は教員の負担感だ。子どもの学びを変える試みは、教員への負担に目をつぶる試みとはしたくない。

インターネットで「源流太鼓と小学校」を検索すると、本校だけしか見あたらなかった。「無気力な小学生、地域行事に参加しない子どもたち」と酷評されるこのごろである。地域の子どもを育て、一つでも「これならできる」という自信をつけて中学校に送り出すには、勉強だけでなく行事への参画という戦略が欠かせない。

「そーれ!」、「やーあ!」.....

強く透き通った声に合わせて、8張りの源流太鼓が次々に鳴り出すと、「翔」の文字を背にした黒色のシャツが一齐に動き出す。運動会での演技、6年生の「表現」活動である。静まりかえった運動場、下級生や保護者を前に太鼓の音は魂を揺さぶるように命の息吹を伝えていく。巧みなパチさばき、無言で腕を動かす子どもたち。

10月1日、開校132年目を迎える本校の運動会である。今年は652人の子どもたちがこの日を創り上げた。その最終演技を演奏で飾るのが源流太鼓である。10分以上もかかる太鼓の披露に、打ち手となった6年生は真剣な眼差しを見せる。

二期が始まると子どもの意欲を引き出す授業や行事が始まる。源流太鼓をつかったの演技はその一つである。

太鼓が学校に届くのは運動会の二週間前、それまでは木の樽を太鼓代わりにして、早朝や20分休み、昼休み、放課後に練習する。子どもたちのやる気を奮い起こすため、先生たちがつきっきりで指導する。

この源流太鼓が本校で始まったのは、第29代・野原博校長(昭和59~63年)のころだと、「川西源流太鼓」の林正義さんから聞いた。「川西源流太鼓」は昭和55年に結成され、源氏祭りや多田地区の盆踊り活躍していたという。結成の4~5年後に、多田小の子どもたちにも教えることになり、以降今日まで続いているとのことであった。

(「川西源流太鼓」現在、会員は約20人)

